

4th Edition, August 2021
Copyright © 2021, Japanese Christian Fellowship Network

Production in whole or in part, in any form
is permitted if it is to be used for one to prepare him/herself
for returning to Japan as a Christian.

Japanese Christian Fellowship Network
(USA) P.O. Box 17982
Irvine, CA 92623-7982, USA
Tel: 949-424-7535
E-mail: ushq@jcfm.org
(日本) 〒 101-0062
東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル内
Tel/ Fax: 03-5217-2505 E-mail: nihon@jcfm.org
HP: <http://www.jcfm.org>

Printed in Japan

目次

Letter to a Japanese Returnee by Dan Brannen	2
1. 帰国を通しての成長（逆カルチャーショックに備える） リンダ・エドワーズ・オルソン....	6
2. クリスマンとなってからのお里帰りの心得 黒田 朔	9
3. 日本の教会に備える①「なぜ教会に行くのがそんなに大切なのか」 鈴木 茂	11
4. 日本の教会に備える②「日本の教会の歴史と背景を知る」 鈴木 茂.....	13
5. 日本の教会に備える③「教会選びに際して考えるべきこと」 鈴木 茂	15
6. 働くことの意義・聖書の労働観 山崎 龍一	18
7. 世間様にお目にかかりたい！ 大倉 信	24
8. 冠婚葬祭セミナー「ダニエルのように、パウロのように」 大和 昌平	31
9. 占い、スピリチュアル系、サイキックなどって、どうなの?? 高見澤 栄子....	33
10. 「あなたの父と母を敬え…そうしたら、しあわせになる」 高橋 秀典	36
おわりに（JCFN30 周年記念に寄せて）.....	43
Appendix A 帰国者お役立ち情報	45
Appendix B 帰国者お役立ちアプリ	46

Letter to a Japanese Returnee by Dan Brannen

Dear Tadashi,

It was sad to say goodbye to you at the airport today, maybe sadder for you alone on the flight home than for the rest of us who are still here together. We hope that this letter will bring encouragement to you and that you are reading this during your flight as we had planned. As you can see we included pictures of your friends from the “Sayonara party” last night. We hope these will help you remember to pray for each one of us as we pray for you.

The title of a book I am reading is, “The Pursuit of God in the Company of Friends.” I really like this title because it describes just what we have all been doing together in the fellowship this past year. I remember when you first joined our fellowship two years ago. You were probably a little nervous being around a group of “religious freaks” who were always talking about “God” and “Jesus.” But we are so thankful that you kept coming back because, as you said, you experienced a sense of welcome in our group that you had never known before. As you know now, what you experienced was the love of Jesus!

The title of my book also reminds me that God has created us for fellowship with Him but also, importantly, deep fellowship and community with one another in the faith. We know that finding such a community when you get home may be difficult. But I would encourage you to ask God to help you find like-minded, like-hearted followers of Christ who can encourage each other. It may take some time and it may be small at first—2 or 3—but Jesus promised us that even where 2 or 3 are gathered in His name He would be present there with us. And I frequently find comfort in Jesus’ promise to His disciples that He would never leave them, but be with them to the end of the age. We are His disciples, and it’s not yet the end of the age, so we are totally covered by this promise too! We will pray that God will help you discover or build this “company of the committed” who can serve Jesus together in your community.

I am sure that many of your friends have reminded you not to forget the basics, the “fundamentals” of remaining strong in your walk with Christ. I am glad that you have already adopted the important habit of daily Bible reading. I personally find the One Year Bible reading schedule helpful. It gives me a balance of reading from the Old Testament, the Psalms, Proverbs and the New Testament every day. We have encouraged everyone in the fellowship to keep a prayer-journal, and if you haven’t started this yet, consider this as a way to launch your prayer life as you begin your faith-journey in Japan. Communicating with your Heavenly Father—with praise, thanksgiving, requests, and remembering your family and friends—will be the best way to keep this relationship active and growing.

I remember that you told me about your biggest concerns about returning home: facing your family and friends, finding a good church, and living out your faith at work. (Did I forget, “finding a Christian spouse!”) Each one of these topics needs a whole discussion, but let me share a couple of tips that may be of help to you.

In relation to your family my experienced Asian friend advises, “Go slow, keep low, don't blow.” Think long term. Following Christ is “a long obedience in the same direction” and influencing our families for Christ also can take a long time. What your family needs to see, first of all, is the attitude and character of Christ in you, and then there will be an opportunity to talk about the reasons for the hope that you have in Christ. Pray for them. Love them. Serve them. Let God prepare their hearts for the good news of Christ.

The above advice for dealing with families is not bad for handling your relationship with churches as well. Some churches are afraid of returnees who act like they “know-it-all” because they have lived and studied abroad. If you look for a church not only where you can be fed and nurtured, but where you can serve in a way that God has gifted you, then you will be “starting off on the right foot.”

In order to keep your faith at work and influence your colleagues for Christ you need to draw on all of the resources we have just mentioned—a consistent pursuit of personal spiritual disciplines, a tight group of Christian friends, a community where you are being built up in the faith and the heart of a servant. You can do your best work on the job when you remember that you are serving Christ who wants you to bless others. Your friends at work will eventually take notice and be asking you about your purpose in life.

Tadashi, you have an exciting journey ahead. God is taking you on the most thrilling way to live—being on mission with Him. And He always goes before you to prepare the way. We all have the privilege of knowing and serving Him only by His grace. So don't fear. Don't lose courage. Remember, nothing can ever separate you from God's love. And enjoy your mom's great cooking that you told me about!

Your brother in Christ,

Dan

タダシへ

今日、空港でさよならをいうのは、けっこう悲しかった。俺たちは、みんなこちらにいるから、一人で飛行機に乗って家に帰るタダシの方が、悲しかっただろうな。この手紙が飛行機に乗っているタダシの励ましになっていることを願うよ。見たら分かるけど、昨日の晩の、「サヨナラ・パーティ」の写真を同封した。俺たちがタダシのことを祈るように、この写真が、俺たち一人一人のことをタダシが祈るのを思い出す助けになればいいと思う。

今、俺が読んでいる本の題は、「友だちの中に生きながら、神を捜す」というものなんだけど、俺がこの題を気に入っているのは、それが、この1年間、俺たちがしてきたこと、そのままだからなんだ。2年前にタダシが、初めて俺たちのフェローシップに来たときのこと、よく覚えてる。タダシは、いつも神だとかジーザスだとか、言ってる「宗教系」の人たちに囲まれてちょっと神経質になってたと思う。でもタダシが、フェローシップに来続けたこと、本当にうれしかった。タダシが、「今まで体験したことのないような、歓迎されてるっていう感覚」が俺たちのフェローシップにあった、って言ってくれたこと、それもうれしかった。今、タダシが理解するように、まさにそれがジーザスの愛だったんだよ。

この本の題を見ると、神さまが俺たちを神さまとの関係（フェローシップ）のために作ってくれたっていうことと、信仰にあって俺たちがコミュニティの中でお互いに強く結びついてるっていうことを思い出す。タダシが、日本に帰ったら、そんな空間を見つけることは、簡単じゃないと思う。でも、タダシが神さまに、同じような考えと心を持つクリスチャンの集まりを、お互いを励ましあうために与えてくださるように、祈ることを強く勧めるよ。それは時間がかかるだろうし、2、3人のグループから始めなきゃいけないかもしれないけど、でもジーザスは、「わたしの名のもとに2人でも3人でも集まる時、わたしもそこにいる」と言っているんだ。俺自身も、ジーザスが弟子たちに、「わたしは決してあなたがたを捨てない。わたしはあなたがたと世の終わりまで共にいる」と約束しているところから、よく慰められるんだ。俺たちはジーザスの弟子だし、この世も終わってないから、この約束はまだまだ有効だよ！俺たちは、神さまが、タダシに、いっしょにジーザスに仕えることのできる「熱心に従う仲間たち」を与えてくださるように、祈ってる。

タダシのこっちでの友だちが何人も、キリストと歩んでいく基礎を、基本を忘れるなって励ましてくれたと思う。タダシが、毎日聖書を読むという大切な習慣を身につけたこと、励まされた。俺は、個人的には一年で聖書を読み通すプランが役に立つと思っている。旧約聖書、詩篇、箴言、新約聖書をバランスよく毎日読めるからだ。また、俺たちのフェローシップでは、祈りのジャーナルをつけるように、みんなに勧めてきた。もしタダシがまだこれを始めてなかったら、日本で、祈りの生活を始めるのに、とてもいいから、是非始めたらいい。天の父と、賛美と、感謝と、願いと、家族や友人たちを覚えて祈ることを通してコミュニケーションするのは、神さまとの関係を育てていくのに、最高のやり方だと思う。

タダシが、日本に帰ることについて心配していることを教えてくれたのを覚えてるよ。家族や友人に会うこと、いい教会を見つけること、職場で信仰を貫くこと。おっとっと、クリスチャンの結婚相手を見つけることを言うのを忘れてたな！今挙げたこと、ひとつひとつきちんと話したら、キリがないけど、助けになるかもしれない、2、3のヒントをあげたいと思う。

タダシの家族との関係だけど、俺のアジア人の友だちが言ってた。"Go slow, keep low, don't blow"（ゆっくり、姿勢を低く、無理をして失敗するな）。長期戦だと思ってかかれ。ジーザスに従うのは、「一つの方向へずっと従順でいること」だし、ジーザスの影響力を家族に与えるのも時間がかかる。タダシの家

族の人が、タダシの中に見なきゃいけないのは、ジーザスの態度と人格だ。そうすれば、タダシがジーザスにあって持っている希望について説明できる機会がきっと訪れる。家族のために祈ろう。愛そう。仕えよう。神さまに、家族の人の心を、キリストの福音のために整えてもらおう。

この家族伝道のためのアドバイスは、教会との関係にも使えるんじゃないかな。アメリカから帰ってきたクリスチャンが、海外に住んで訓練を受けたから「自分は何でも分かってる」っていう態度を取るのをいやがる教会は多いと思う。もしタダシが自分が必要なものを与え、養ってくれるっていうだけじゃなく、神さまがタダシに備えてくださった方法で仕えることのできる教会を捜すとしたら、それは正しい一歩だと思う。

職場において信仰を貫き、同僚にジーザスの影響を与えるためには、たゆまぬ霊的鍛錬、強く結びついたクリスチャンの仲間、信仰と奉仕の心が育つコミュニティなど、今まで挙げたいろいろなことが役に立つだろう。タダシを通してほかの人に祝福を与えたいと思っているジーザスに仕えているときに、タダシは職場でいちばんいい仕事ができるんだと思う。職場の同僚は、きっとそれに気がついて、タダシの人生の目的について尋ねてくると思うよ。

タダシ、お前にはこれから、本当に胸の躍るような道が待っている。神さまは、神さまの目的のために生きるという、この世で一番エキサイティングな生き方にタダシを呼んでいるんだ。そして神さまはいつも、タダシの一歩先をあるいてくれてるよ。俺たちは、みんな神さまの恵みがあるから、神さまを知り、仕えるっていう特権を持ってるんだ。だから、恐れちゃいけない。勇気を持っていこう。どんなものも、タダシを神さまの愛から離せないってことを、忘れちゃいけない。まずは、タダシが話してくれたお袋さんの手料理を、楽しんでくれ。

タダシのキリストにある兄弟、

ダン

帰国を通しての成長（逆カルチャーショックに備える）

リンダ・エドワーズ・オルソン

「学生宣教トレーニングマニュアル 1992」より翻訳

*この文章は、夏の短期ミッショントリップに行き帰ってきた人たちに向けて書かれたものです。必ずしも日本への帰国に当てはまらないものもありますが、逆カルチャーショックに備えるための参考資料としてはとても役にたつと思いますので、ぜひお読みください。

逆カルチャーショックとは何でしょうか？それは簡単に言うと、他の文化の中で長い間生活をした後、自分の育った文化に戻っていく移行期の事です。その過程では、しばしば、その人の自己アイデンティティーと、文化的に自分が縛られている、と感じてしまう部分とのぶつかり合いが起こるのです。

では、何故人によっては帰国が難しいのでしょうか？大まかに言えば、その人の考え方や価値観が変わったか、変わりかけているのに、帰ってきた環境は同じようには変わっていないからです。（もちろん長く外国にいた人にとっては、帰国後の環境は前にいた時ととても変わったものになっているでしょう。でも夏だけなどの短期の海外滞在者にとってはそうではありません。）自分の考え方や価値観の変化が深ければ深いほど、この過渡期は大変になります。具体的には、次のようなことで帰国者は困難を経験するでしょう。

- 自国の文化の贅沢さ・豊かさへの反発。
- メディアの表面的な価値観への反感。
- 新しい立場やあやふやな立場への対応、不安定な家庭の環境。
- 短期で海外にいた時に任されていたような責任がもうない。
- 自分の教会の贅沢さや世界への関心の低さへの幻滅。
- 本当に心配して話を聞いてくれる友達がいらないような気がする。
- 自分の経験や変化を人に話し、分かち合う事がうまくできない。
- 海外へ行く前は無意識でしていた習慣や行動が、もどってきてみると気になったり無意味に思えたり煩わしく思える。

人々はこの帰国の時期をどのように切り抜けるのでしょうか？基本的に3通りの反応があります。

- 「同化型」の人は自国の文化にすぐになじみ、ほとんどか全く問題なく、夏の事は忘れてしまったように見えます。このような学生はうまく適応したように見え

ますが、実はとても大きな成長の機会をのがしてしまったのかもしれない。自分の見た事、学び、疑問に思った事を、新しい人生観や世界観に取り入れていないように見えるからです。

- 「孤立型」の人は自国の文化を拒絶するよう見えます。短期海外滞在者の場合は、これはそこまで長くは続きません。自国の文化を、自分も一員だった事を理解し、すぐ悲観したり、批判したりします。社会の構成がどうなっているのか、どのように適切に築かれているか、という事を見ることに限界を持ち、新しい自分の人生観を作り出せずにいるようです。ついにはどこかに帰属したいという気持ちから自国の文化に屈服するかもしれません。このような反応の仕方も帰国後成長できる機会を逃してしまいます。
- 「統合型」の人は、具体的にはないかもしれませんが、自分が今経験している不調和が起きる事を予想している人です。このような人は自分に起きた変化、あるいは起きている変化に気がついていて、それをすぐに終わらせようとしません。自分の短期の経験が自分と他の人々の人生に長く影響する事を願っています。つまりこのような人は、自分の見た事、学び、疑問に思った事をクリエイティブな別の生き方として統合していこう、と奮闘するのです。

この「統合型」になるには、あるいは他の人が「統合型」になり、成長するための帰国を助けるにはどうしたら良いのでしょうか？簡単には答えは出ませんが、役立つガイドラインはあります。

- 帰国したばかりの時は肉体的に沢山の变化を経験するでしょう（疲労感、無関心、不眠、食欲減退、など）。これらは普通で、特に長い間飛行機に乗っていたりすると起きます。バランスのとれた食事、睡眠、そしてエクササイズはないがしろにできません。これらは体をもとのバランスのとれた状態に戻す助けをしてくれます！（感情の面でも助けてくれます。）
- 期待が裏切られる。これが帰国者にとって一番大きな問題なので、帰国前に話し合っておくのが一番良いでしょう。もし帰国前にどのような変化が待ち構えているのかをあらかじめ知っていれば、一步先取りです。もどったら、何がいま不調和の原因になっているのか見極めようとしましょう。どのように考え方や価値観が変わってきていますか？
- 聞いてくれる人、そして質問をしてくれる人と話し合ってみましょう。どんなことをしましたか？どんな人に会いましたか？どんな生活をしましたか？どのようなことが一番簡単でしたか？どのようなことが一番大変でしたか？どのようなことがおかしかったですか？どのようなことが悲しかったですか？自分についてどのような事を学びましたか？他の文化については？教会についてはどのような事

を学びましたか？神様については？（このような事を一緒に話し合ってくれる人を一人見つけましょう。）

- もし日記を付ける習慣があれば、一日に一日分の日記を読み返して、神様にその日記から新しい事や一度学んだ事をもう一度教えてくださいとお願いしてみましょう。そして続けて、思いついた事や祈りを日記に書きましょう。
- 祈りましょう。ひとりで、他の人たちと、祈りのパートナーと。出会った人々、教会、自分自身、経験を分かち合いたい人々のために祈りましょう。
- 霊的なチェックアップをしましょう。神様が近く感じられるようになったか、遠く感じてしまうようになったか？何が自分の神様への愛をもっと成長させてくれるか？新しいデボーションの仕方？長い散歩と祈り？神様とだけ過ごす一日？独創的に、でも規律をもって、そして寛容な父なる主を忘れずに。
- 短期滞在中に成功したり成し遂げた事を思い出して、神様があなたに下さった、あるいは確認して下さった賜物や長所をリストにしましょう。
- よい話し手になりましょう。自分の短期滞在の経験から、相手にすぐわかるような短い話ができるようになりましょう。
- 「夏はどうだった？」という質問を軽く受け流さずに、きちんと答えられるようになりましょう。よく意味が伝わるように話し、お互いに夏の経験から分かち合えるような時間をもっと持てるか聞いてみましょう。

短期海外滞在中の後、あなたの人生はあるのでしょうか？もちろんです！そしてその経験から他の人たちに一番インパクトを与えるのは、自分の経験を時間をかけて見直し、取り込み、その結果、新しい行動計画をつくる人です。今年、キャンパスにもどってくるすべての短期滞在の帰国者が、聖霊の力によって自分の経験を自分の今の人生に取り入れ、キリストの教会の宣教のために他の人々に影響を与える事ができるように祈りましょう。

「学生宣教トレーニングマニュアル 1992」より

クリスチャンとなってからのお里帰りの心得

黒田 朔

【JCFN 会報 2005 年 8 月号掲載】

証しはクリスチャンの責任と義務ではありません。クリスチャンになったからこそ出来る特権と恵みです。また、家族をクリスチャンにするのはあなたの仕事ではありません。「イエスは主です」と告白させてくださるのは聖霊の働きです。(I コリント 12:3) ただ、キリストを信じて、あなたと家族に起こった喜びや感謝を大切な家族に話せばよいのです。

心配（ネガティブな心）より配慮（ポジティブな心）が大切です。「あなたの幸せ」は家族の喜びです。ただ、家族はあなたの喜ぶクリスチャン生活を知らず、ある種の宗教に対する先入観や誤解のために不安で、反対するかもしれません。クリスチャンになったからこそ「出来ること」を第一に。家族の期待や気持ちを大切にしながら、いつもより、もっと積極にかかわることです。「あなたはクリスチャンになって変わったね。」と（もちろん良い意味で）言わせましょう。

お盆がやってきますが、実は、仏事でもあなたに出来ることがあります。仏壇へのご挨拶を家族と共に天の父なる神様へお祈りするときに来れば最高ですね。もちろん、お祈りはあなたの家族を愛してくださる主に向かって捧げます。家族が守られた感謝に加え、この家族の存在のために先祖が与えられたことを感謝し、家族の嬉しい絆を喜び合い、実家にいる間の目的や家族の必要について祈ると良いのではないのでしょうか。

お墓参りも大丈夫。お墓は大切な家族、先祖を記念し偲ぶ良いところです。お墓(死者)に向かってお祈りはしませんが、お墓をきれいに掃除をし、お花で飾り、故人を偲ぶのは大切な家族を思う素朴な気持ちです。上記と同じ祈りをトライするのもよいでしょう。

同様に、お葬式もあなたの信仰を表すときです。同じ悼みをあなたらしさで表現しましょう。人一倍気を利かし、骨惜しみせずに働き、時間やお金を生かして用いましょう。あなたが遺族の 1 人である場合、あらかじめお話して「焼香順位」からはずしておいてもらおうと混乱を避けることが出来ます。焼香の目的は亡くなった方への敬意と遺族への弔意を表すことですから、あなたがその目的を果たし、慰めとなるように葬儀の前に家族に会って丁寧に挨拶をすると良いでしょう。焼香に対しては色々な意見や立場がありますが、あなた自身の理解や行動の自由が他人へのつまづきとならないようにするために焼香は避け、焼香台の前に立たずに済ませる工夫と配慮とをしましょう。もし、立つことになった場合は、焼香はせずに、心を込めて黙祷の中で亡くなった方を主にお委

ねし、遺族の慰めを主に祈るとよいでしょう。また葬儀後、皆さんが帰り、寂しくなった頃に訪問したり、お花を届けたりするのも良いことです。「習慣」外のことをするのは、面倒がらずに心を表すためには時間とお金も必要です。

「お里帰り」だけが証しの時ではありません。日頃のコミュニケーションがポイントです。あなたは家族にとっての喜びの発信源、救いの初穂です。離れている家族に安心を届けるために喜びを伝えましょう。あなたの家族はあなたがクリスチャンになったことを知っていますか。家庭事情によっては事前に伝える事が必要ですし、伝える事は祝福の第一歩。クリスマスカードは良いチャンス！普段の家族間のコミュニケーションは暖かく、心を届けましょう。電話、誕生日・結婚記念日のカード、メールなどをこまめにしていますか。

励ましの聖句です。

「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」ルカ 12:11-12

「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにあ
る希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていな
さい。」第一ペテロ 3:15

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」使徒 1:8。

まず、大切な家族にイエス様を通して見つけた幸せと永遠の命の望みを知ってもらうことです。聖霊の力を頂いて、久しぶりのお里帰りを楽しんでください。あなたが心配するほど、周りには考えていないことであるものです。「食前の感謝のお祈り」もいいチャンスです。「食事の感謝の祈りをしても良い？」と一言、尋ねてみてはどうですか？



*この原稿と同内容のセミナーを Youtube でご覧になれます。

<https://www.youtube.com/watch?v=LA7XoQmqRRw>

「日本の教会に備える」シリーズ①

「なぜ教会に行くことがそんなに大切なのか？」

鈴木 茂 (仙台聖書バプテスト教会牧師)

【JCFN 会報 2016 年 5 月号掲載】

1. 神は「教会」を通して救いを完成されるから

クリスチャンが教会に属することはとても大切です。地上における教会は、完成のときまで戦いがあります。完成に至る途上なので、当然課題や問題があるのです。また、様々な弱さを抱えたまま歩むことでしょう。教会は完全に回復するまで（エペソ 5:27～28）問題や課題を抱え続けます。しかし神の全被造物を含めての「回復＝Restoration」と呼ばれる救いの働きの現場の中心は、実は「教会」なのです。

すべてのクリスチャンは、永遠に聖霊によってイエス・キリストと一つとされた、大切な選ばれた存在です（エペソ 1:4）。万物を創造された神は、聖霊によってキリストと永遠にひとつとされた教会を通して、救いのわざ、即ちキリストにある神の民である教会と全被造物の再創造の働きを完成に向かって推進されています。神の救いのわざの始まりを『第二の誕生』（新生）と言いますが、それは既に教会から神の新しい創造が始まっている、ということなのです。神の救いの中心は教会の創造です。そして神は地上の教会を通して救いを完成されます（ピリピ 1:6、マタイ 28:19～20、エペソ 1:3～14）。

2. 教会は復活されたキリストによる新しい創造の初穂だから

神と人類に敵対するサタンの破壊的な支配が横行するこの世界にあって、教会は三位一体の神の再創造の始まりです。神はキリストをこの闇の世界に遣わし、私たちが闇からご自身との永遠の交わりに移し入れて下さいました（コロサイ 1:13）。まさに、教会はキリストを信頼することによって、闇から脱出した神の民（『終末の民』即ち、神とともに救いの完成の一端を担う民）なのです。今も尚、闇に覆い尽くされているこの世の現実の中で、神は罪人である私たちをキリストによって救い神の民、教会として創造して下さいました。まさしく私たちは闇の中からキリストによって復活させられた神の民なのです。

パウロは、キリストの復活を新しい世界の初穂（始まり、創造の拠点）とよんでいます。そして、聖霊によってキリストと永遠に一つとされている教会を、古い創造の中からキリストによって生み出された新しい創造の初穂と言っています（2 コリント 5:17）。即ち、闇に覆われているこの時代において、神はキリストによって新しく生まれ変わった教会を通して世界に救いと癒しの光を灯されるのです（マタイ 5:3～16、コロサイ 1:27）。

3. 教会は地上における「キリストのからだ」だから

教会はまた、キリストのからだと呼ばれています（1 コリント 12、コロサイ 1:18）。教会を説明するひとつのイメージとしてこの言葉が使われることはよくありますが、これは比喩的表現ということ以上に、特に使徒パウロは、教会が地上においては真のキリストのからだであることを強調しています。即ち、キリストという『頭』（意味は、「源」と地上における教会はつながっていて、実際に教会は頭であるキリストのいのちを受けて、そのキリストのいのちを地上に表現するからだであるということなのです。つまり、キリストは、ご自身が十字架と復活を通して集められた教会をご自身のからだとして、地上を歩まれるのです。教会は地上におけるキリストのからだであり、からだを通してご自身の救いのみわざを展開し、そして神を知らない闇の世界に回復の希望を指し示すのです。

クリスチャンはひとりとして例外なく、聖霊によってキリストと永遠に一つとされています。それゆえ、クリスチャンは皆、教会（キリストのからだ）であり、そのからだの大切な器官なのです。またクリスチャンは、他のクリスチャンとともにキリストのいのちを表現する（奉仕の意味と目的）喜びが伴う責任が委ねられています。この責任は、キリストから与えられている冠、また特権と理解することが望ましいと思います（詩篇 8）。

4. 教会の兄弟姉妹を愛し仕えることを通してキリストの愛を学ぶから

からだの様々な臓器が一つの「生きる」という目的に従って各々の働きをしているように、私たちもキリストのからだである教会の交わりに十字架の愛が受肉するよう、自らも愛において成長することを祈り求め、またお互いに協力し合って主の福音に仕えることを学び続けるのはとても大切です。私たちはひとりひとりが日々の営みの中で生ける神との交わりを深めますが、キリストとつながっていることゆえに、ひとりであってもいつもキリストにある教会（クリスチャン）とひとつであることを意識していることが大切です。そして、ヘブル書でも勧められているように定期的に定められている場所に集まり、主に礼拝を捧げ、主の教えをいただき、そしてお互いに顔を合わせて恵みを分かち合うことが大切です。三位一体の神は、定期的に民を特定の場所や時間に集めてくださり、そこに集まる民に特別な恵みを注いで下さいます。ともにキリストの愛の豊かさを体験し、またともに同じめぐみの中から生かされていきます（エペソ 3:14～21）。神は、ご自身が集められた信仰の家族を通して教え、励まして下さいます。そしてお互いの関係を通して、霊的な知識や知恵、霊的な洞察力、また罪に対する意識や自覚を深めると同時にキリストの十字架による罪の赦しの深さに気づかせて下さいます。そして、そのようなことを通し、罪からの漸進的な解放や聖め（人格的な成長）を与え、主の福音の前進の為に更に献身する思いを備え続けて下さいます。

5. キリストを愛することは教会を愛することだから

頭であるキリストを愛するとは、キリストの真のからだである教会を愛することです。教会を愛することを学び続けることによってキリストへの愛が具体的に表現されます。キリストを愛することを学ぶことは、キリストのからだである教会を愛することを学ぶことと同じです。キリストは、教会を生み出し、そして教会を聖めるために犠牲を払われました（ピリピ 2:5～8、エペソ 5:25～28）。私たちはキリストによって救われているものとして、キリストとともにキリストのからだである教会を大事にし、また神の家族である教会や隣人を愛することを学び続けることによって主への愛を明らかにするのです。主を愛し続ける者は、主の愛によって少しずつかたち造られていくのです。

「日本の教会に備える」シリーズ②

「日本の教会の歴史と背景を知る」

鈴木 茂 (仙台聖書バプテスト教会牧師)

【JCFN 会報 2016 年 6 月号掲載】

1. 『日本の教会の歴史と流れ』

日本の教会の歴史の大まかな流れを少し見てみましょう。1549年にザビエルが宣教のために来日しました。ザビエルは、イエズス会の本部から優れた人材を日本に派遣するように要請し、それにより多くの宣教師が送り込まれてきました。それによって、キリスト者の人口は増えました。

最初はキリスト教に対してわりと穏健な立場をとっていた豊臣秀吉も 1596年頃からキリスト教に対する態度が変わり、当時のフランシスコ会に属する宣教師たちを徹底的に迫害するようになりました。数多くの殉教者たちが信仰のゆえに血を流した歴史が、日本にも存在します。キリストを信頼する信仰によっていのちを捨てた人々が日本の歴史に実在したことを知ることは、今の私たちにとって大切なことだと思います。

一方プロテスタントの影響は、1859年に始まりました。特に知られているのは、ヘボンと呼ばれたアメリカの長老会のジェームズ・カーティス・ヘップバーン宣教師の来日です。当時来日した宣教師たちを通して、教育機関なども発展し、福音が社会の中で開花するようになりました。

また、神は戦後、北アメリカやヨーロッパから多くの宣教師たちを遣わし、日本各地において宣教のわざを始められ、数多くの教会を生み出されました。現在の日本の教会の背景には、長い歴史の流れの中での神の働きと、神と共に仕えてこられた働き人や兄弟姉妹たちの祈りと労苦があります。今教会が生かされている、ということの背景には必ず信仰による労苦、犠牲が積み重ねられてきた歴史があるからです。

2. 『なぜ教団教派がたくさんあるのだろうか』

現在日本には、160以上の教派があると言われています。なぜ、同じキリストを救い主として信じて救われているのに、多くの教団や教派が実際に存在しているのでしょうか。

私たちはまず真の教会、即ち、キリストのからだは一つであることを認める必要があります。救い主であるキリストは、ひとつです(1コリント12)。パウロは特にキリストによって全被造物も全人類も最終的にはひとつとなることが救いの完成であると言明しています(エペソ1:10、コロサイ2:20)。何よりも重要なのが、十字架に磔られる前のキリストの大祭司としての祈りです(ヨハネ17)。その祈りの中心は、父と子であるキリストがひとつであるように、私たちも一つであるように、ということでした(ヨハネ17:21)。私たちは皆聖霊によってキリストに預かるバプテスマによってキリストのからだ、即ち、教会となります。

しかし、地上においては様々な教団教派が確かに存在しています。歴史的に見てみると、このような枝分かれは、聖書解釈の違い、強調点の違いなどから生み出されています。また、地上に存在している限り、私たちはみな未完成ですから、様々な間違いを犯したり、また高慢さゆえに互いに対立してしまうこともあります。優れた働き人であったパウロとバルナバでさえも意見の対立で別行動を取るようになりました。しかし、神の働きは彼らを通して継続され、最終的には彼らも主にあって和解するようになりました。実際に人間としての弱さゆえに、時には主にあって実際はつながっていても別の教団や教派として主のわざに各々が仕え続けることも必要だと思います。大きな御手の中で、主は同じ主を救い主として崇め、信頼し、主のわざに仕えている教団教派の働きを必ず主のひとつの方向へと導いて下さると思います。

このようなことに触れつつも、私たちはお互いに霊的にも、人間的にも成熟して、お互いに理解する心を持つ必要があると思います。偏見をもって他教団や教派を見るのではなく、彼らからも学ぶ姿勢が大切ではないでしょうか。また、真摯に聖書解釈や理解の違いを語り合い、神の教えに対する関心や理解を深め続けていくことが大切だと思います。たとえば、私は幼児洗礼を授けることはしませんが、幼児洗礼を授ける教会や、またこの儀式の大切さを語られる方々の説明を聞いたことがあります。理解できることもたくさんありました。彼らの説明を聴くことによって、目が開かれた部分もあります。

大切なことは、キリストにあって救われるために絶対的に必要な真理の理解です。たとえば、神が三位一体であること、キリストが神であり人となられて私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目に復活されたこと、また私たちはキリストを信じる信仰によってのみ救われるのであって、行いによってではないことです。基本教理と認識されていることに関しては、一致している必要があります。教団教派の違いがあっても、基本教理に関しては、全く同じ土台です。この点はとても重要です。

日本の教会に備えるシリーズ③

「教会選びに際して考えるべきこと」

鈴木 茂 (仙台聖書バプテスト教会牧師)

【JCFN 会報 2016 年 7 月号掲載】

1. 『異端とは？異端の特徴とは？』

気をつけなければいけないことは、異端と呼ばれる教会と彼らが教える教理です。間違ったことを教える人々は、初代教会から既に存在していました。パウロもペテロもヨハネも当時の異端と異端的教えに対して戦い、教会を健全に守るために大切な教理を徹底的に教えられました。その目的は、クリスチャンたちの嗅覚を養うためであり、異端の教えに対して敏感に気づけるようになるためでした。

異端は今に始まった現象ではありません。異端の歴史も繰り返されているのです。日本では、特にモルモン教、ものみの塔、また統一教会などが裾野を広げています。異端教会の特徴は、必ずキリスト教の中心的教理を狙い、彼らの前提に従って巧みに聖書を解釈し、それを真理として教えます。彼らが歪める教理こそが、実は私たちの信仰の土台となるものなので、私たちは真理をよく知る必要があります。

異端の教会が歪める教理は、三位一体論、キリスト論、聖霊論、救済論、そして終末論です。上記に記した教会は、三位一体の神を否定します。キリストに関しては、キリストの神性を否定したり、また人性を否定したりします。聖霊に関しても、たとえばものみの塔の教えは、聖霊は単に力であり、人格的ではないと主張します。また、救済論に関しては、キリストの十分性を否定して、良き働きや行いによる救いを解きます。終末論に関しても、キリストを神救い主として信頼する信仰によって救われる、という立場を否定するので、自らの救いに関する確信は不安定なものになります。

2. 『教会を選ぶ為には？日米の教会の違いをどう理解したらいいのでしょうか？』

帰国してから、どのような信仰生活を送ることが望ましいでしょうか。地域教会の大切さはわかりますが、実際にどのようにして所属する教会を決めたら良いのでしょうか。

既に語りましたが、日本にも教派の違う教会がたくさん存在しています。教会を選ぶことに案外難しさを感じるかもしれません。選ぶ際に少し参考にして頂きたいことを少し紹介します。

まず、その教会において福音が福音として解き明かされているかどうか見極めることが大切です。みことばの教えはクリスチャンの成長にとって絶対に欠かせないものです。

次に、しばらく集ってみて、礼拝、学び会、また交わりに参加してみましょう。肌で感じることも重要です。また、ひとりひとりのクリスチャンも、また家族としての教会も救いの完成の途上ですから、全く問題や課題のない教会はありません。しかし、交わりの中で習慣的に争いがあったり、批判があったり、陰口があるようでは問題だと思い

ます。これは私の自論ですが、クリスチャンの大切な使命として、自らの救いの完成に努めることと(ピリピ 2:12～13)、そしてそのためには祈り、知恵深く自分が属する教会を決めることが大切です。その際に、信仰の友や、信頼できる信仰の先輩などに相談に乗っていただくことが大切だと思います。

帰国者にとって、日本の教会を選ぶ際におそらく遭遇する課題は、海外にある教会と日本の教会の多少の違いや雰囲気の違いに戸惑うことではないかと思います。おそらくその違いは、「善し」「悪し」ではないことが多いように思います。しかし、雰囲気的な違いの印象は、案外大きいので、大切なことを妥協することなく違いを受け入れていくには時間がかかるかもしれません。

私自身もアメリカの教会に11年集いましたので、アメリカと日本の教会の違いは肌で感じるができます。雰囲気を比べると、北米の教会の方が明るい感じはします。また、特に交わりなどでは親しみやすさも北米の教会の方があるかもしれません。そのような福音文化の中で救われて、しばらく生活すると、日本の多くの教会では最初寂しさを感じることもあると思います。北米の方々は、初対面の方々にも直ぐに近づき、挨拶の際に適切なスキンシップをして相手に歓迎の喜びを表現したりしますが、おそらく日本ではそのようなことは希かもしれません。このような違いがあることは、最初から受け止めていく必要があるのかもしれません。

私はアメリカの複数の教会で11年間過ごし、帰国後今の教会に牧師として赴任して22年が過ぎました。もちろん、牧師として教会に属するのと信徒として教会に帰属するのは多少違いがあるかもしれませんが、私は22年間の日本の教会での体験を通して、いろいろな違いを知り、体験していくことによって私たちは成長するということを学ばされています。最初は馴染めなかったけれど、今はこれが本当に自分に必要な恵みだった、と言い切れることがたくさんあります。神は様々な教会に、また国々に違いを与えることによって私たちを豊かにしてくださっていると思います。私が毎年訪問して少し奉仕させていただいているモンゴルの教会は、北米の教会とも日本の教会とも違います。アメリカの教会にも開放感と自由がありますが、モンゴルの教会にはもっと開放感があると思います。日本の教会とは対極です。私は彼らから得るものがたくさんあります。しかし、正直言って馴染めない要素もあります。でもそれから学べます。また、モンゴルのクリスチャンは、日本人である私から得るものがたくさんあると言われます。まさに誰が優れている、ということではなく、神は私たちを成長させ、祝福するために、様々な恵みを散りばめておられるのです。また、私たちも帰属する教会の祝福を受けて成長しますが、同時に、私たちの存在や今までの歩みの中で神が与えて下さった恵みや体験が、時間をかけて信頼関係を築く中で教会に新しい視点や方向性を示すのに役立つこともあるでしょう。主にあって皆が知恵と時宜になかった働きによって、小さな「改革」を起こす存在になれば良いのではないのでしょうか。

どんな小さな改革も神のときになされていきます。小さな忍耐と従順という道程の中で、「時」が満ちます。私も日本に戻り今の教会で23年目になります。振り返ると神によってもたらされた小さな変革、もしくは改革がありましたが、どれも不思議な方法でなさ

れたと思います。私たちの独自性、今までの人生の経験（たとえば、留学経験）を神は祝福のために用いて下さると思います。ですから、皆様に神様が与えて下さった海外での体験や経験を主に感謝し、知恵深く、またキリストの愛によって教会の祝福の為に用いて下さい (1 コリント 12:7)。

働くことの意義・聖書の労働観

山崎 龍一

KGK07 同期会合宿セミナー要約 (2005/11/18 より)

「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。」(詩篇 127:1-2)

1. 就職を考えていくにあたって考えなければならないことの原則

上の詩篇が書かれたと思われる時代背景は、イスラエル王国が滅んだ後、第二神殿が再び立て直される頃であると考えられている。この時代活躍したネヘミヤは、いわゆる異邦人たちの中で国家公務員として働いていたが、神様からのビジョンをいただき、エルサレム神殿の城壁を建て直す、という働きに召された。

神殿再建築の時代に書かれた書物(エズラ、ネヘミヤ、エステル)は「回復の書」と言われているが、この時代の特徴として挙げられることは、神様が確かに導きを与えているにもかかわらず、出エジプト記や新約の時代のようないわゆる「奇跡」はほとんど起こってはいない、ということである。彼らは、その日常生活の会話の中から神の御心を見出していっているのである。

このことから学ぶ第一の原則は、私たちが就職や進路を求めていくにあたって、すばらしい奇跡や、これだ！というみことばがなければ何もできないわけではない、ということである。普段の日常の中から御心を受け取ることができる、という確信をもって進んでいこう。

2. クリスマンとしての大前提

私たちがどんな職業を選ぶか、どこに就職をするか、ということより先に私たちが考えなければならないことがある。それは、キリストに服従する、という生き方を選ぶ、ということである。主を信頼する生き方を身に着け、選び、服従、信頼し、教会を建て上げ、神の国に献身する、というところから始めなければ、就職しても何の意味もないのである。

「また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。」(1 テモテ 6:19)

この御言葉は、ベテランのパウロから若いテモテに言われた言葉である。若い今の時代に築いている土台の上に一生が成り立つと言っても過言ではない。ではこの土台とは何だろうか。それは、クリスマンとしての自己理解である。「あの人は自分をどう見ているのだろう。」という人からの評価や「俺ってなんてだめなやつなんだろう。」とい

う自分自身の評価に流されてはいないだろうか。そうではない。私たちはクリスチャンとしての自己理解とアイデンティティを持つ必要がある。それはキリストにあるアイデンティティである。罪が赦され、自分は愛されている、というところから始まるアイデンティティである。

クリスチャンとして仕事をしていくとき、この世の人たちとまったく同じことをしながらも、会社の中の業務上の判断や後輩の指導などを通して、クリスチャンであることがその仕事にも反映されていく。仕事を選んでいくとき、どういう風に就職するかではなくて、人生の中で何を願っているか、どうすれば人生に意味があり、幸福感があるか、ということがクリスチャンの選びのポイントである。あなたは、キリストへの服従、信頼、神の栄光を本気で考えて、そのために仕事をしようとしているだろうか。

3. 働くことの意義

3-1. 聖書の最初の命令

「生めよ、ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(創世記 1:28)

これが私たち人間に初めて与えられたことばである。つまり、労働とは神様の業に参画することであり、「社会人」だからするのではなく、「人」に与えられている神様からの使命なのである。そのことを考えたとき、今自分は何をするべきなのか、就職する前から考えていく必要がある。

勉強や友人関係もその一例である。ノンクリスチャンの友達に、あなたの生き方を通してよい影響を与えているだろうか。日常生活の中で証や伝道をしているだろうか。これらのことも、神様から与えられている「労働」として捉え、今から忠実に上の命令を果たしていきたい。

3-2. 具体的な仕事

「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」(創世記 2:15)

それでは具体的には、人は何をしていたのだろうか。一つ目は「耕すこと」である。これは、何か(物や人)の成長の為に働くこと、ということが出来るだろう。二つ目は「守ること」である。これは、管理することや秩序を保つことである。このようなことが、神様が人間に任せてくださった仕事である。

3-3. 墮落後の使命

「それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地に満ちよ。野の獣、空の鳥 --- 地の上を動くすべてのもの --- それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。』(創世記 9:1-2)

ところで、労働の原則は、実はアダムが罪を犯した結果として労働がのろわれてしまった後も、なお続いている。罪が入ってくることによって、労働は少し辛くなった。昇進できなかったり、意地悪な先輩がいたり、給料が減ることもある。それでも神様は私たちに労働をゆだねてくださっている。その神様に答えて、どのように働くか、ということが私たちに問われている。新約聖書を見てみよう。

3-4. 新約聖書

3-4-1. 怠惰を戒める

「私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるな、と命じました。ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」(2テサロニケ 3:10-12)

3-4-2. 動機がきよめられる

「奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。人のごきげん通りのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。」(エペソ 6:5-7)

3-5. 「やりたいこと」と聖書の労働観との関係

10年ぐらい前は「やりたいこと＝仕事」という価値観が学生の就職活動を支配していた。しかし、この価値観を聖書からは導き出すことはできない。「やりたいこと、好きなこと」の動機を深く考えていくときに、そこには罪が含まれている。「やりたいこと」は「きよい」こととは限らないし、やりたいことが入り口になることがあっても、それに達成することが人生のゴールとは限らない。「やりたいこと＝仕事」は現代における「偶像」にすぎない。預言者になりたくてなっている人は、聖書にはいないのである。

ちなみに、この価値観は近年変わりつつある。2003年8月号の就職ジャーナルでは、野村證券のキャッチ・コピーは「やりたいことによって自分の枠をせばめていませんか？」だった。また2005年夏のソニーの広告は「あなたには意志がありますか？」であった。「大切なのは責任感と信頼感です。」なども出てきた。やりたいことをやっていく、ということが通用しない時代になってきているのである。キャッチコピーは10年ごとで変わっていくらしい。何によって思想や価値観が影響されているのか、私たちは注意をする必要がある。

世の価値観によってやるべきことを決めるのではなく、神様の最初の命令(信頼と服従)への応答として、自分のすべきことを考えていくべきである。

4. この世に対する理解

4-1. キリスト教はこの世に通用しないか？

クリスチャンの人からも、「キリスト教はこの世では通用しないのではないか。」という発言を聞くことがある。しかし、「Pioneer」や「森永」「大和運輸」など、すばらしい企業が、キリスト教の価値観によって社会に貢献するビジネスを展開している。

クリスチャンが何かいい加減なことをするとき、「そんなことでは社会で通用しないぞ」と言われることがある。しかしそれはクリスチャンの倫理観より社会の倫理観やプレッシャーの方が強い、という考え方に基づいている。「社会の倫理では動くが、御言葉には動かされない」というようなクリスチャンの信仰では、本当に御言葉に従う生き方をしているのかわからない。むしろ私たちは、「クリスチャンとしての責任をどうして果たさないのか。」と問うべきなのではないだろうか。私たちが本気で御言葉に従うなら、約束を守ることにしても、もっと誠実であるべきだからである。

4-2. この世は、神様が支配している

「…あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになります。」(ダニエル 4:25)

ダニエルが自分の上司であるネブカデネザル王へ言ったことばである。私たちは、会社の上司や会社の面接官の裏にも神様がいらっしゃることを信じているだろうか？ある人が就職面接で自分がクリスチャンであることを証したときに、「あなたの信じているものと会社の方針が違っていたらどちらを選びますか？」と聞かれた。その人は一瞬迷った後「自分の信じているものです。」と言った。結果は採用。「今の世の中は自分のためにうそをつく人が多いけれど、信念を貫くあなたはすばらしい。」と、その後ノンクリスチャンの面接官は言ったそうである。

4-3. 終末的な視点をもつこと

この地上での完成が来るときに、自分が何を大切にしていたか、ということが問われる。山上の垂訓は、この世の価値観から見ると「幸い」でもなんでもないが、神の国の完成から見るので、価値観の逆転が起こるのである。

5. 仕事を通して神の国を建て上げること

5-1. 仕事は自己実現ではない

自己実現とは、マズローによると「内側にあるものを最大限に引き伸ばして生かすこと」である。しかし、これは聖書の価値観ではない。

5-2. 仕事を「定義」してみよう

自分の仕事への「定義」が、その人の仕事への姿勢を決める。自分が何のために働いているのか？医者でも「お金をもうけるためにやっている」のか、「人を救うためにやっている」のかによって、仕事の意味は違う。

5-3. 召命観

私たちが「神からの召し」を感じる時、その召しは、御心を求めることであり、賜物が他人への配慮のために用いられることであり、救いを求める心が与えられることであるはずである。したがって、自分の思いが、自分の欲求を満たすことであるならば、それは、「召し」ではありえない。

5-4. 能力ではなくて、人格。

飛行機は、離陸して着陸するのが当たり前のように、能力はあることが前提である。

本当の良い仕事は、人と一緒にするものである。だから、「信頼する」「信頼される」人格が問われる。仕事をすると「自分がやった方が早い！」と思うことがしばしばあるが、そのときに自分でやってしまう人は、他の人との良い仕事や信頼を失ってしまうのである。120%できる人が一人いたとしても、80%の能力を持つ同労者が5人いる人にはかなわないのである。また、能力は会社で身につくが、人格は若いときからの積み重ね。促成栽培はできないのである。

6. 価値観の成熟

「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなし。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。」(詩篇 127:1-2)

6-1. 主が建てる家

神様の祝福と仕事の成功はイコールではない。なぜならば、仕事とは神の国を建てあげていくための奉仕であって、自分の家を建てることではないからである。ネヘミヤの時代も、人々が神殿の壁を作ることをやめ、おのおの自分の家を建てるために帰ってしまったとき、仕事は中断してしまった。そのときネヘミヤは、「あなたがたの現況を良く考えよ。」と促した。

問われるべき問題は、自分のしている仕事は「神の国を建てあげていくための労働なのか、そこそこ食べていくための労働なのか。」である。私たちはどちらかを選ばなければならないのだ。そしてこれは、一生を左右する問いなのである。

6-2. 主が守られる

この「主が守る」という言葉は、出エジプトの 12 章で「主が寝ずの番をした。」と書かれているのと同じことばである。モーセが自分にはとてもできない出エジプトを果たしたときに、神様が寝ずの晩をしてくださった。そのようにして、私たちの働きをも神様が守ってくださるからこそ、労苦が実を結んでいくのである。

6-3. 労苦が実を結ぶのは

自分がしようとしている仕事で、あなたは何をしたいのか。その報酬は何か。給与以外の報酬はなにか、ということを考えてみよう。そうすれば、自分がキリストの弟子として生きているかどうか、自分の労働観を確かめることができるだろう。

6-4. 主に信頼すること

人間関係における信頼を建て上げることにより、キリストへの信頼と服従を養おう。

「世間様にお目にかかりたい！」

大倉 信（サンディエゴ日本語教会牧師）

【EC20 Beyond ワークショップ要約】

皆さんは一度でいいから会って話してみたいという人がいますか。私にも会ってみたい人がいます。時々その方の名前を聞くことがあるので、いつもどんな方なのだろうと、一度、時間がある時に、あるいはどこかでばったり会うことができないかと思っているのです。その方の名前はこんな時に聞くことがあります。息子が父に「おやじ、大変なことをしてかしてしまったよ。」その大変なことを聞いた父が子に「息子よ、もうこれからは世間様に顔向けできんぞ」

そうです、その方の名前は世間様です。よく耳にする名前ですから私は「世間様に会ってみたい！」のです。でも、私はどこを探しても「世間様」を見つけることはできません。世間様と画像をググっても、その当人の姿形はないのです。

この「世間様」は見えない存在のようです。しかし、確かに日本人社会に君臨しているように思われます。多くの親達が戦々恐々「これでは世間様に会わせる顔がない」と狼狽し、大企業の社長もいつもこの世間様の前ではふかぶかと頭を下げるのです。このように考えるなら、この世間様は日本社会の影の支配者です。このお方はその姿を見せずに、時に総理大臣をも震え上がらせ、屈強なスポーツ選手達も恐れをなしてしまうのです。

多くの日本人にとって「世間が許しません」と言われることは「人間として許されることではありません」とほぼ同義語となっています。また、時にこの「世間」は別の呼び名で呼ばれることもあります。そうです、世間が流動化したものを私達は「空気」と呼びます。

有名な話があります。戦艦大和という軍艦がありました。日本が総力をかけて作った巨大な軍艦ですが、今は海の底にあります。もろくも米軍の攻撃を受けて沈んだのです。大和が撃沈される前に軍上層部の作戦会議が取り上げられます。そこでは「それでは勝てないであろう」というような作戦が、参列していた者たちにより取り決められて、案の定、大和は海に沈みます。なぜ、そんな負けると分かっている戦いに彼らは臨んだのでしょうか。その場所にいた小沢治三郎という中将が後にこう振り返っています。「全般の空気よりして、当時も今日も大和の特攻攻撃は当然と思う」（軍令部次長・小沢治三郎中将 文藝春秋 昭和50年8月号）。大和はその時の会議部屋を支配していた軍司令部の空気によって沈んだと言っても過言ではありません。「今はそんな話を持ちだせる空気ではありません」、皆さんもこのようなことを経験していますでしょう。

よく言われます。海外で多くの日本人がクリスチャンとなる。これは事実だと思えます。その理由は色々あると思うのですが、これは私の考え、憶測ですが、その一つの理由は海外には日本に存在しているような、世間様が不在だからです。世間とは世の間と書きます。この言葉は日本独特のもので英語では訳し得ないものです。「ソサイエティー」

や「ワールド」とは異なるのです。誰もソサイエティやワールドに頭を下げたり、恥ずかしさを感じたりしません。ですから自由に信仰をもつことができるのです。しかし、一歩日本に帰ればそこはこの世間様が存在している国なのです。

ですから、その正体を予め知っておくということ、また、どのようにこれと向き合うべきか、ということを知っていれば、私達が日本に帰国した時の対策も考えることができるのではないかと思います。また日本人ではない方達が日本人に伝道をするにあたり、また日本の教会に関わりを持つ時に知っておくことはとても大切なことになるのではないかと思います。これを知らない、日本人を理解できないと思うからです。

「日本人とユダヤ人」という著書で有名な山本七平氏という作家がおりましたが、彼は「日本教」という言葉を書いています。そして、その中心において山本氏もこの世間様を意識していることが分かります。なぜなら、山本氏が指摘しているように日本に見られる日本教の中心にあるのは「神」概念ではなく「人間」という概念なのであり、言うまでもない世間様とは顔の見えない漠然とした人間集団のことを示すからです。

この山本氏は興味深いことを書いています。世界の多くの人々が世界の始まりということについて「創世記」をその土台としていますが、山本氏は日本人にとっての「創世記」とは夏目漱石の「草枕」なのだとその一説を掲げています。

『人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり三軒両隣にちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みにくかろう。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくいところをどれほどか、寛容（くつろげ）て、つかの間の短い命を、束の間でも住み良くせねばならぬ』

聖書はその第一ページ、第一行においてこう記しています。「はじめに神は天と地を創造された」。しかし草枕は「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり三軒両隣にちらちらするただの人である」というのです。この違いこそが日本と諸外国の隔たりといっても過言ではないでしょう。

そして、この人の世を「寛容（くつろげ）て、つかの間の短い命を、束の間でも住み良くせねばならぬ」ために日本人が自ずと導かれていった生き方というのはこの世間になるべく迷惑をかけずに、互いに空気を読みあい、余計な摩擦は作らずに、気を使い合うということだったのかもしれない。

何かが起こるとすぐに日本のニュースは町の人にインタビューしていますが、あのインタビューは大切なものと思われまます。そのことによって視聴者は世間の平均的な考えを知るからです。その辺りの意見を自分も押さえておけば、世から叩かれることはありません。平穏無事で、皆がくつろげるのです。

また、日本のテレビは午前中、ほとんど同じ番組を流しています。その前日やその週に起きた出来事、事件に対してコメンテーターという人達が皆、各々の意見を言っている

ます。夜も同じです。ひな壇にすわってタレントやお笑い芸人が色々なことを言い合っています。そして、それがあるところに一応、落ち着き、皆が頷くことでその話題は終わります。この類の番組をいくつか見れば、その出来事に対して自分はどんな意見を言えば無難なのか、だいたい頭にはあります。それは世間が認める意見なのです。その意見を言っている限り、あなたにバッシングがくることはありません。

ここまでお話して、もうパンドラの箱を開けてしまっていることにお気づきでしょうか。それは日本では私達が GOD、すなわち「神」と言っていることよりも「世間様」の方が存在感があるということです。なぜ日本社会に聖書に記されている「GOD」が伝わらないのか、その構造が見えてきませんか。日本社会には昔から世間様が神様になる確固たる地位を得ていますゆえに、そこに神様、GOD が入る余地がないのです。

この世間様の中に身を置いて生きていくということは、世間様が左だと言えば左を、右だと言えば右を向いている限り、自分に害がおよぶことはなく安泰に生活できるという保障を意味するので、その結果、「物事を自分で考える」ことがなくなり、自分が本当に願っていること、本当に正しいことを決断することがなくなります。

しかし、本来信仰を持つということは、その人の個人的決断によって自由になされますが（実際に日本国憲法もそのことをうたっているのですが）、日本には憲法の上に見えない法があり、信仰の決断の時に私達は神を見上げるのではなく、周りの人達を見回すのです。私達、日本人にとって「一番恥ずかしいこと」は「人と違うことをすること」であり、私達日本人にとって「良い人」とは「世間を騒がせない人」のことを意味するのです。

皆さん、私達はこの日本人に向けて聖書の言葉を語っているのです。こんな日本人である私達がキリスト教徒になったのです。そして、私達の多くはその日本に帰国するのです。この日本人に私達は福音を伝えるのです。そして、誰彼ではなく今までお話ししたことは私達の心にも幼い時から染みついていることです。時に私達はクリスチャンになってからも「神様がおるべき場所」に「世間様を置くこと」が多々あるのです。

このようなことは信仰者の信仰姿勢や教会形成においても起こりうることで、そのような意味で先の山本氏は「日本教キリスト派」と日本のキリスト教を呼んでいます。「キリスト教徒」「キリスト教会」と言っているながら、そのキリスト教の教義の上に「日本教」があるということです。日本教というと宗教のようですが、まさしく、それは宗教に近いもの、否、宗教と言ってもいいのかもしれませんが。なぜか？世間という見えないものを相手にして生き、恐れているからです。これは日本人の集まる外国の日本人教会も例外ではありません。キリスト教会なのか、それともその上に「日本人なるもの」があるのか、これは時間をかけて検討すべきことかと思えます。

これらのことを踏まえて聖書の中に見られる似た現象を見ていきましょう。今までお話ししたような意味での「世間様」という言葉はさすがに日本独特のもので聖書にはでて

きませんが、確かに人間は日本人でなくとも、いつもどこか心の中に世というものに特別な力を感じており、世を恐れて生きているということが分かります。

その典型的な一人の人はポンテオ・ピラトという人です。これから読みます聖書の言葉はイエス・キリストがいよいよ捕えられ十字架にかけられるのか否かという緊迫した状況の中で、ローマ帝国のユダヤ州を管轄していた総督ピラトの前に連れてこられた時のことです。

「ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度、彼ら（そこに集まっていた群衆）に呼びかけた。しかし彼らは、わめきたてて『十字架につけよ、彼を十字架につけよ』と言いつづけた。ピラトは三度目に彼らにむかって言った。『では、この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死に当る罪は全くみとめられなかった。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう』。ところが、彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架につけるように要求した。そして、その声が勝った。ピラトはついに彼らの願いどおりにすることに決定した。」ルカによる福音書 23 章 20 節 -24 節

このところに来るまでにピラトは鞭打たれてボロボロになったイエスと群衆を前にどうにかイエスを釈放してやりたいと願っていました。しかし、そのような思いが心にあるながら、彼は最終的に、このイエスを十字架にかけるとを承諾したのです。この時のことを日本語聖書でルカは群衆の声がピラトの心にある思いに勝ったといっています。もっと詳しくいいますと「ピラトは自分の心にある思いに従わずに、自分が同意できないこと、納得できないことであっても群衆の声の大きさに従った」ということです。

総督ピラトにはイエスをどう処分するかという権力が与えられていました。そして彼はその心の中ではイエスに罪を見いだすことができずに釈放することが適切だと思っていたのです。ですから実際に彼の考えに反対する人が何千人いても、彼は自分の考えを押し通すことができたのです。しかし、彼の心の思いは群衆の叫びに揺れ、彼の上にいるローマ帝国のカイザルという名によっていとも簡単にくつがえってしまったのです。

さて、このピラトは彼が群衆の声に負けてしまう前にしばしの間、イエスを前に話した会話というものがヨハネによる福音書 18 章 33 節 -38 節に記されています。

「さて、ピラトはまた官邸にはいり、イエスを呼び出して言った、『あなたは、ユダヤ人の王であるか』。イエスは答えられた、『あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか』。ピラトは答えた、『わたしはユダヤ人なのか。あなたの同族や祭司長たちが、あなたをわたしに引き渡したのだ。あなたは、いったい、何をしたのか』。イエスは答えられた、『わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない』。そこでピラトはイエスに言った、『それでは、あなたは王なのだな』。イエスは答えられた、『あなたの言うとおりに、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける』ピラトはイエスに言った、『真理とは何か』。」

皆さん、このイエスとピラトとの会話の中に一つのことが浮き彫りになります。すなわち彼は総督で、人の命をその手に握ることができるような人でありながら「真理とは何か」とイエスに尋ねているということです。

ここでイエスとピラトの違いは何かというと、それは、ピラトは真理を知らず、イエスはそれを知っていたということです。ピラトの場合、真理を知らないうちは、心の中に自らの言動を決める確固たる規範というものがありませんのでそれが正しいと思われないようなことであっても世の圧力に屈してしまったということです。

ピラトはこの出来事により、今日全世界、「使徒信条」を唱える全ての教会から「(イエス・キリストは) ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と人類史上、最も不名誉な言葉を唱えられる人となってしまったのです。なぜ？彼は神の子イエス・キリストよりも世を恐れたからです。

さて、このピラトの姿を足がかりとしてさらに見ていきたいのですが、聖書を注意深く読んでいきますと、いくつかの箇所「世」という言葉の周辺には「真理」が、そして「真理」の傍には「自由」という言葉があることを私達は見出します。この箇所にも世という言葉が四度、そして真理という言葉が三度、書かれていますでしょう。

ここに「世間様」に支配されている日本人として生きる私達に一筋の光が照らされるのです。すなわち私達が生涯「世間様」の動向によって生きるのか、それとも「真理」に従い生きるのかという選択のチャンスが私達に与えられているからです。

そして、そのことにより私達が自分の生涯を「自由」と共に生きるか否かということが決まると聖書はいうのです。

「イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた『もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知らるであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。』」(ヨハネによる福音書 8章 31-32 節)

皆さん、私達が世間様の前に跪いている時、キリストにある真理は覆われてしまっています。それゆえに、真理を知ることはできない、本当の自由を得ることはできないと聖書はいうのです。もし聖書が言うように、キリストを知ることによって、この私達のたった一度の人生を、自分の気持ちに正直に、主体的に自由に生きることができるとするならば、これ以上の幸いがあるでしょうか。

誤解なきよう付け加えておきますが、日本人が相手の気持ちを読む、そこから表現される「おもてなし」は世界一だと私は思います。太鼓判を押せます。これらは素晴らしいものなのです。しかし、世間様が神の輝きを覆ってしまわないように一つの提案をしたいと思います。

主の前に、努めて自分で考え、自分で決断しましょう。

世間様と共に私達が生きるこの問題は「考える」ことがなくなる、ということです。言い方を変えれば「自分で自分のことを決断できなくなる」と言ってもいいかもしれません。心の中に自分がしたいこと、やりたいことがあるのに、世間様の無言の力が常に私達には注がれているので、自分の思いに偽って私達は生きることになるのです。ある人はこれを「抑圧」と言いました。そして、抑圧とは不自由の極みを意味する言葉です。「この進路に進みたいのに」、「これがしたいのに」、でも周りの空気を読みながら自分の思いを封印する。その封印はレストランでメニューを前に「これが食べたい」と心の中で思いながら「皆と同じでいい」と周りに合わせることから、結婚という人生最大の決断の時ですら発動されることがあります。

私達はこのことを心の片隅においておくべきです。すなわち我々日本人は「自分の思いや考えを限りなく押し止め周りに合わせる人」を「大人」として評価しています。ですから私達は必死に「人様に笑われないように」「みっともなくないように」「肩身がせまくならないように」世間様の様子を恐れながら生きざるをえないのです。

今日、心理学者は抑圧された思いや願望は心の中で消えることはないと言います。それはそのまま心に残り、蓄積されていき、やがて爆発するのです。現代、日本語辞典はその現象を「キレル」と呼んでいるのです。張り詰めたヒモはやがて切れるのです。「あの人が」という人達が信じられない行動に出ることをよく見聞きますが、それは抑圧されていたものが噴出したということなのです。

人の視線によってその人生を決め、常に人からどう見られているかに恐れ、自分には願ひ・考え・思いがあるのに、世間様を気にするあまり、その思いを全て心の中に押さえ込んで生きていくのか、キリストの僕となり、弟子となり、真理を知り、創造者なる神に造られた者として、私達も創造的な人生を送るのか、キリストが約束する本当の自由というものを人生に見出し、その中で生きていくのか、これらのことを私達がどう受け止めていくかというところに、私達の未来があるのではないのでしょうか。

時にあなたの家族があなたの結婚やあなたの仕事や将来について色々なことを言うでしょう。あなたがたの友人や同僚があなたの態度や信仰について色々なことを言うでしょう。そして、自分にそのような気がないのに彼らの言葉を受け入れ、数年後、それが間違っていたということが分かって彼らはその責任を取りません。ですから他の人の言葉に私達は揺さぶられる必要はないのです。

責任をもって自分の事を決めることを習慣とする。「もしあなたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、今あなたがたの住む地のアモリ人の神々でも、あなたがたの仕える者を、今日、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」(ヨシュア記 24 章 15 節)とヨシュアは言いました。そうです、彼は神の前に自らの信仰と決断を表明したのです。

私は最後に私達日本人にとって一番、難しいお勧めの言葉をもってこのメッセージを終えなければなりません。このようなお勧めではなく何とか日本の方々に別の言葉で言うことができないかと考えたのですが、やはり他にはありません。

すなわちその問いかけとはこういうことです。

「これらのことを決断するのはあなたの親兄弟でもない、あなたの親戚でもない、あなたの両隣に住む人でもない、誰彼でもない、あなた自身です」。



*この原稿と同内容のセミナーを Youtube でご覧になれます。

https://www.youtube.com/watch?v=da_6MUIDOB4

冠婚葬祭セミナー要約「ダニエルのように、パウロのように」

大和 昌平

【JCFN 会報 2007 年 8 月号掲載】

今回は、仏式葬儀や法事において「クリスチャンは冷たい」と言われる訳に注目してみます。その上で、ダニエルのように柔軟かつ堅固にということと、パウロのように自己の確信に立って行動することとを述べたいと思います。

1. 「クリスチャンは冷たい」と言われる訳

私たちが葬儀や法事に出なかつたりすると、「クリスチャンは冷たい」と言われませんか？ 日本の宗教は、仏教とミックスした祖先崇拜を基盤としています。祖先崇拜には二つの柱があります。亡くなった家族や親族への愛惜の情と、死者とその霊への理由無き恐れです。慕いながら、拭いがたい恐怖感におののくという、矛盾した感情を同居させています。

神のみを神としたい私たちは、死んだ家族を拜むことを避けようとして、焼香をしなかつたり、式そのものに出なかつたりします。そうすると、クリスチャンは死んだ家族への愛惜の情を持たない、冷たい人々だと責められるのです。私たちは死霊を拜むことを避けているのですが、日本人は家族に対して冷たいと考えるのです。

私たちはこのような行き違いをもたらす、日本人のもつ祖先崇拜という宗教的基盤をまず理解しなければなりません。

2. ダニエルのように柔軟かつ堅固に

ダニエルはユダ部族の青年貴族として、異国バビロンに捕囚となります。ダニエルは異教社会の中で柔軟に生き、バビロンおよびメディアとペルシャの歴代の王のために良い働きをして、要職に就いてもいました。しかし、ダリヨス王が自分を拜むことを命じ、ダニエルの神信仰そのものを否定しようとした時には、彼はいのちをかけて戦いました。日に三度の神への礼拝を守り通し、たとえ獅子の穴に投げ入れられようとも堅固に信仰に立ったのです。異教社会において柔軟かつ堅固に信仰に生きたダニエルは、日本のキリスト者のモデルになります。

葬儀や法事には、死んだ家族への愛を表わすという側面があります。これは、十戒の第五戒「父と母を敬え」にかなう行動ではないでしょうか。親族が集まり、死者を覚えて共に涙することは、立ち直るために必須のグリーフ・ワークとして最近では評価されています。葬儀や法事に近寄ることもしないのではなくて、そこへ行って掃除や食事の世話などできることをやってみてはどうでしょうか。そして、泣く人と共に泣きましょう。そこに家族としてのあなたがいることが大切なのです。

それをした上で、死者を神として拜む儀式だけは避ける努力をします。説明をす

れば、案外認めてくれるかもしれません。親族会議にまで発展する厳しい状況に置かれるかもしれません。しかし、最初が肝心だと思います。中途半端にすることが、後々一番苦しくなります。ここは正念場です。ダニエルのように、自分をかけて戦うべきです。

祖先崇拜は社会儀礼ですから、それに従わない者には社会的制裁がきます。それは非常に厳しい場合もあり、挫折することがあっても、互いに励まし合っていくべきです。難しい状況であれば教会で祈ってもらい、異教社会においてダニエルのように粘り強く生き抜きましょう。

3. パウロのように各自の信仰的良心に立つ

もう一人のモデルは、異教社会ローマで宣教したパウロです。世俗的な大都市コリントでの教会建設の苦心が、コリント教会への二通の手紙から伝わってきます。市場で売ってる肉はすべて異教の神に一度供えられたものでした。それを食べても良いのか、どうか。パウロは、そこまで神経質にならずに食べてもよいと言うのですが、自分は食べないと言うのです。それは、教師である自分が食べるのを見て、つまづく信徒の良心のために食べないのです。

パウロはどこまでも信仰者の良心を大切にしました。自分が神の前に良いと思うことは堂々とやればよい。やましく感じることは、まわりがどうであろうと止めるべきである、と。さらには、自分の信仰的良心はOKだけれども、自分を見てつまづく若い信仰者の良心のために食べない。これは込み入っているようですが、各自の良心を大切にす点で貫かれた姿勢です。

仏式葬儀や法事においては、焼香が焦点となります。焼香には死臭を消すとか、死後の幸福を祈るとか色々な意味があります。しかし、焼香に必ず伴うのは死者崇拜です。あの場所で死者崇拜をすることに対しては、私たちは明確にNOなのです。しかし、前に出ない人、前に出て祈る人など色々なオプションがあり、どれが絶対に正しいとは言えないのです。こういう場合には、その人の信仰の良心に従って行動し、それを互いに尊重する。これがパウロの原則なのです。

もう一度まとめとして、ダニエルのように、パウロのように、異教社会日本にキリスト者として一人ひとりが力強く生きてゆきましょう。

占い、スピリチュアル系、サイキックなどって、どうなの？？

高見澤栄子（モンゴルキッズの家支援会代表・JCFN 理事）

はじめに・・・

帰国者や海外経験のあるクリスチャンだけでなく、キリスト者にとって非常に大切に誠実に向き合う必要のあるトピック、「占い」。占いというカテゴリーにはしていますが、本文にもあるように、ニューエイジ、スピリチュアルガイダンス、サイキック・・・様々な形で私たちの身近にあり、意外と多くのクリスチャンが知らないままに使っていたり、影響を受けたりしています。信仰の歩みが始まったばかりの人には、「え！？だめなの？ホーリースピリットだからスピリチュアルなものはなんでも良いと思っていた！」と思う人もいるかもしれません。

聖書を読み続ける中で分かってくるのは、サタンは、まさに羊の革を被った狼で、クリスチャンの私たちを巧みに騙し惑わします。その手口の一つがこの記事で取り扱っている「占い」なのです。この記事を通して、読む者の目が開かれ、心が解放されますように。そして、真の神様の愛の中に喜びと平安で歩み続けることができますように！

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」（ヨハネの手紙第一 4:18）

「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ 8:32）

—JCFN—

<現状>

日本では新聞や雑誌、TV やインターネットなどに、星占い、誕生月占いなどがあふれています。繁華街や商業施設の中にも占いコーナーなどがあり、その種類はカードや、水晶玉、八卦、方角、手相や人相や、様々な物の形態を読むこと、また、コンピューターを使った占いまであります。TV 番組にも人気の霊能者がよく登場して、人々がぶつかっている問題を霊的に解決するといったプログラムが人気を得ています。占いは世界各地で昔からそれぞれの伝統的な方法で行われてきています。世界の歴史が啓蒙主義の感化をうけた科学や物質を絶対とした近代を経て、ポスト近代は霊性に回帰する時代になりました。ニューエイジやスピリチュアルガイダンス、サイキックリーディングなどと呼ばれた名前になりましたが、実態は昔からの祖霊や偶像の神々への占いや霊媒です。今日疫病や自然災害の頻発や政治の不安定など、将来の見えない状況に、人々は霊の世界へますます関心を高めているのではないかと思います。

<聖書では>

聖書は占い、霊媒、口寄せなどを厳しく禁じています。レビ記 19 章、20 章、申命記 18 章にはくりかえしそのようなことをする者、また、求める者たちに死の宣告がなされています。「霊媒や口寄せのところにおもむき、彼らを慕って淫行を行うものがあれば、わたしはその者から顔をそむけ、その者をその民の間から断つ。」（レビ記 20:6）。民数

記 22 章、23 章には、イスラエルを敵対する王が、古い師バラムを雇って、イスラエルを呪うようにしますが、神はバラムがそのようにすることを許さず、かえってイスラエルを祝福する言葉を三度にわたって繰り返させた記事が書かれています。力ある霊能者も、神の前には一たまりもないことがわかります。新約聖書では、パウロが占いの霊に取りつかれた女を解放した記事や、エペソにリバイバルが起きたとき、銀貨五万枚分の魔術の本が焼き捨てられたことが記録されています。占いや霊媒は、霊の世界の存在や死者への嘆願が本質で、それは、創造主であり、主権者であり、人類を愛とめぐみで導こうとしておられる神さまから、人間の心を引きはなすものとして、聖書は厳しく禁じているのです。

<心すること>

身近に気軽に登場する占いについて、私たちが気を付けなくてはならないことがあります。一つは、霊の世界は確かにあり、神様に対抗する悪魔と悪霊も実際に存在するということです。悪魔はそれを覆い隠したり、物語のようにぼかして、人が真剣に考えないようにしています。彼らの目的はただ一つ、人間の心を神様からそらすことです。ですから、人間にとって魅力的な物を目の前にさしだしておびき寄せるのです。人生の問題の解決を先祖にからめたり、過去の罪悪感を利用したりします。もう一つの策略は、段階的に引き込む、ということ。出勤前のニュースの後の血液型占いで自分の血液型の占いが良ければ、ラッキーと思ったり、色占いで勧められた色のものを身につけてみたり・・・。それらは本当に小さなことで、自分の中でも真剣にとっていない、ただの何の影響もない無害なものに思えます。このくらいならいいだろう、という小さな一歩を踏み出すと、信仰や良心に曇りがかかって、だんだんと深みに引きずり込まれていくのです。そしてそれにはご利益が餌として使われます。この世の繁栄や成功はもちろん、人から認められることや、人をコントロールする力なども、敵が私たちを深みに引きずり込む道具です。そして、十分に敵の手に落ちたら、悪霊は本性をあらわして、破壊へと突き落とすのです。悪魔は巧妙な嘘つきで、悪魔などいないと思わせ、私たちを油断させて近づいて奴隷とするのです。

<対処の方法>

とにかく心をそちらにむけないことが大事です。私たちを愛し、ご自分の御子イエスキリストを十字架で処罰してまでも、私たちを赦してくださり、受け入れて神の子としてくださる神様がおられ、今も最高の主権をもって君臨しておられることを、信仰によって受け止めて、人生をこの神様に委ねることです。ですから、占いの類には一切目をむけない、手を触れないことです！人生の問題の解決は、神様に祈って信頼して、心に平安をもつのはクリスチャンに与えられたすばらしい特権です。もう一つは、気づいた罪を神の前に悔い改めて、神様との距離をとらないことです。悪魔に付け入るすきを与えないことです。

<実例>

2人の女性のことをお分かちしましょう。一人は40代くらいの女性で、お会いした時は占いで生活を立てている方でした。周りのクリスチャンの祈りによって教会に来るようになり、ある時私もお会いした時に「占いの道具を全部私が捨ててもいいですか？」とお尋ねしました。彼女はしばらく考えた後で、うなづいてくれました。家は遠くなかったので、その日のうちに全部持ってきてもらうことにしました。大きな手提げバック2つにいっぱい占いの書物や道具を持って来てくれたのです。私が「これで全部？」と尋ねると、一瞬躊躇して、一冊の本をとりだし「これだけは迷いました...。」と告白してくれました。それは方位の本で、朝起きたらどちらの方向に足を動かすかを決めていた物だそうです。この本がなかったら、どちらに足を踏み出しているのかわからなくなる、と説明してくれました。そこで、私は暗い夜道には懐中電灯はとても助けになるけれど、太陽が昇ったら、必要なくなります。同じように、神様の光の中を歩めたら、懐中電灯はもういらないですよ、とお伝えしました、すると顔がぱっと明るくなって、「そうなんですわ！」と確信して、方位の本を捨てるバックにもどしたのです。この方は今では、洗礼を受けて教会の生活を楽しんでおられます。お顔つきも明るくなって、彼女本来の良さが輝きだしたように見えます。

もう一人は80代の女性。商売をしていて、成功のために霊能者を毎月家に招くようになりました。自分でも霊を感じるようになり、自分の家に竜神の石とか、繁栄の神々の偶像をおいていました。商売はウナギのぼりにうまくいき、ビルを建てる計画をするほどになりました。しかしある時、病から失明し、家族にも大変な事件が次々とおきて、商売は破綻して今では、最低ラインを切る生活を余儀なくされています。占いや霊能者に頼ると、最初はなにもかもがうまくいくように見せて、最後にドーンと突き落とすことが多いのです。悪魔のやり方といってもいいでしょう。最近私はこの方をできるかぎり訪問して、愛と真理といのちの神様についてお話しています。去年は家にあった5つの偶像を処分しました。一歩ずつですが、イエス・キリストの愛の神様のすばらしさを味わい始めてくれています。「クリスチャンの神はなにか違うね。あったかいね」と言ってくれるようになりました。

これを読んでくださったみなさまが、すべての暗闇の力から解放たれて、神様の真理と愛の中を、喜びの人生をおくられるようにお祈りします。

「あなたの父と母を敬え・・そうしたら、しあわせになる」

高橋秀典（立川福音自由教会牧師）

【2010年6月26日 JCFN 関東集会メッセージ】

ある有名な作家が、「人間の不幸は、親を選ぶことができないことから始まる」と言ったそうです。残念ながら、本当に納得できると思う方もいるかもしれません。そのような中で、思い浮かぶ有名な祈りがあります。

God, Grant me the Serenity to accept the things I cannot change,
Courage to change the things I can:
And Wisdom to know the difference.

（神様。私にお与えください。変えられないことを受け入れる、平静な心を。変えられることは変えてゆく、勇気を。そして、二つのものを見分ける賢さを。）

変えられないことの代表は、親です。そして、変えられることの代表は、親に対する私たちの態度ではないでしょうか。今日は、家族伝道ということがテーマだと伺っていますが、それ以前に、問うべき根本的なことがあるような気がします。

あるキリスト教系の大学でキリスト教入門のクラスを担当しておられる方が、聖書の教えの核心、十戒の中で最も未信者の学生の心を惹く教えが何かを語ってくれました。それは何だと思いますか？それは、「あなたの父と母を敬え」です。現代の日本社会では、最も基本的な倫理さえも忘れられている中で、学生たちも親に感謝し、尊敬すべきであるという教えを聞いて、はっとさせられるからでしょう。親への伝道を考える前に、異教徒のままの親を、どのように尊敬できるようになるか、それが問われています。親だって、自分たちへの尊敬の思いが伝わってこない子供の信仰の話に、どうして心を開くことができるでしょう。

1. 「父母を敬う」とは、「神を尊ぶ」こと

「あなたの父と母を敬え。」という教えの申命記バージョン (5:16) では、そこに「あなたの神、主（ヤハヱ）が命じられたとおりに。」という補足のことばと、それを守るものへの約束が、「それは、あなたの年齢が長くなるため、また、あなたの神、主（ヤハヱ）が与えようとしておられる地で、しあわせになるためである」と記されています。

パウロも、それを前提に、「主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。『あなたの父と母を敬え。』これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、『そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする』という約束です」エペソ 6:1-3) とわかりやすく語っています。

ビクトール・フランクルというオーストリア出身の有名なユダヤ人の精神科医がいます。彼は第二次大戦時の最も忌むしいアウシュビッツ強制収容所の苦しみをくぐりぬけ、その体験を「夜と霧」という本にまとめそれが不朽のベストセラーになっています。彼が始めた精神療法のロゴセラピーは、人生の意味を問うことで人を立ち直させるもので、聖書のメッセージと矛盾しません。

彼はヒトラーがウィーンに進軍してきたとき、すでに精神科医として尊敬を集めていました。しかし、ユダヤ人であるためナチス・ドイツ政権の支配下では働きを続けることができないのが明白であったため、米国行きのビザを申請していました。数年かかってビザが下りたとき、ユダヤ人に対する迫害が激しくなっており、強制収容所への抑留が間違いない状況になっていました。しかし、彼には年老いた両親がいました。その両親のビザはありません。彼は迷いました。彼がウィーンに残ったところで両親を救うことができるわけではないことは明白でしたが、両親を置き去りにして自分だけが渡米することに後ろめたさを感じていました。

迷いながら家に帰ってみると、父親が、破壊されたユダヤの会堂の瓦礫から拾ってきた大理石がテーブルの上に置いてありました。そこにはヘブル語のカフというアルファベットが刻まれていました。それは、「あなたの父と母を敬え」の最初のことば、「敬え(カベッド)」の最初の文字でした。彼は、この文字を見たとき、自分の使命は、両親とともにウィーンに残ることにあると決断しました。しかし、それは彼も強制収容所に抑留されることを意味しました。彼は自分の医療技術を用いて、秘密警察の悩みを解決し、両親の抑留を一年間伸ばすことができましたが、まもなく両親とともに強制収容所に抑留されました。父は、そこで肺水腫を患って死の床につきます。

彼は医師として、父に最後の痛み止めの注射を打つことができました。彼は、そのときのことを、「私は、それ以上考えられないほど満足な気持ちであった」と書き残しています。母はその後、アウシュビッツのガス室送りになりましたが、移送される直前に、彼は母に祝福の祈りを請い、まさに心の底からの祝福のことばを母から最後に受けることができました。彼自身もその後、アウシュビッツに送られますが、彼はそこで母親のことばかりを思い、母への感謝の思いで心がいっぱいになっていたとのことです。

ビクトール・フランクルはまさに奇跡的にアウシュビッツの苦しみの生き残り、そこでの体験を証しました。それは、苦しみの証ではなく、どんな悲惨な状況に置かれても、人間は高貴に、自由に、美しい心情を持って生きることができるという神のかたちに創造された人間の生きる力の証でした。「何のために生きるのか」という問いに答えを持っている人間は、最後の瞬間まで、真の意味で生きることができるということの証でした。そして、彼が、あらゆる損得勘定や現実的な計算を捨てて、両親とともに強制収容所に入るといふこと決めたことは、一瞬一瞬、人生の問いに答えながら歩むことを、身をもって証することになりました。その後、彼は、この生きる意味の心理学によって、多くの人に希望を与えながら、92歳で息を引き取る直前まで幸いな生涯を全うしました。まさに、父母を敬うなら、あなたはしあわせになり、地上で長生きするという約束のとおりでした。

私たちはそれぞれ、まったく異なった環境で育ってきました。ですから、「父母を敬う」ということが具体的に何を意味するかは、その人その人によって異なります。人の模範に習うことも、画一的な答えを求めることも、無意味である場合が多いと思われます。それにしても、父母を敬うとは、神から人間に与えられた教えの根本であることは間違いありません。このヘブル語の「敬う」ということばを名詞形にすると「栄光」ということばになります。形容詞では「重い」という意味になります。ですから、父母は、神を敬うように、敬わなければならないというのです。そこではあらゆる現実的な計算が意味を失います。どれほど、社会に役に立っていると思われる人でも、父や母を軽く扱っているなら、神の前にその人は軽い存在としか見られません。神は、

「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる」(Iサムエル 2:30)

と言われましたが、それは、親との関係においても当てはまります。

ここで、「尊ぶ」ということばは、「父母を敬え」というときと同じことばが用いられています。

2. 墓守娘の生き方からの解放者イエス

ところで、「父と母を敬う」ということばは、しばしば、「あなたは、自分の人生を歩んではならない」というメッセージに聞こえることがあるようです。しかし、フランクルの例にも見られるように、それは神の前での一瞬一瞬の自由な決断が保障されている中で生きてくることばです。親のコピーになったり、親の期待という呪縛に生きることはありません。一昨年、ベストセラーになった本に、「**母が重くてたまらない-墓守娘の嘆き**」というのがあります。その副題に、「**進学、就職、結婚、介護…どこまでもついてくる母から、どう逃げおおせるか。No と言えないあなたに贈る、<究極の傾向と対策>**」と書いてありました。

ある女性が、田舎の母親の呪縛から逃れるように、東京の出版社に就職し、それなりの仕事を任せられ、外国人の恋人もでき、母親の様々な介入もうまくかわせるようになった33歳のとき、祖父の法事で久しぶりに実家に帰りました。穏やかに法要を終えて東京に帰ろうとしたそのとき、母が耳元でささやきます。「もう何も言わないからね、ただ、私たちが死んだら墓守りは頼んだよ」と。多くの日本人はどんなに親から自由に生きていても、このことばには勝つことができないようです。そこから、「墓守娘の嘆き」というタイトルが生まれています。母からの、繰り返し「これは、お前のためを思っているんだよ」ということばとともに、自分の人生を母親に支配されているように感じて生きる人もいます。しかし、心の内側では、「でも、お母さんは世間体や、自分自身への劣等感から、私の成功を願っているに過ぎない」という思いがいつも込み上げてきます。それで、「父と母を敬え」ということばを聞くと、どうしても、「お母さんは私のしあわせだけを望んでいる」と善意に解釈しなければならないという思いになって辛くなるという人がいます。しかし、「敬う」とは、「あなたのためだから…」ということばを盲目的に信じるという意味ではありません。ある人は、ギリシャ語の「敬う」に、

「評価する」という意味も込められていることから、「敬う」ということばに、主体的な意思の働きがあるということが分かって安心していました。

親は、多くの場合、偏った価値観に縛られています。そこには様々な矛盾した思いがあります。子供が親を深く愛しながら、同時に憎しみを抱くという矛盾を、心理学用語でアンビバレントと言いますが、親だって子供にアンビバレントな気持ちを持つものです。子供には自分の人生を生きてもらいたいと思いつつ、同時に自分のもとからは決して離れてほしくないと願っています。親は、無意識に自分の価値観を押し付けて、子供をコントロールします。簡単に言うと、「親はだれも、めちゃくちゃ身勝手」という部分があるものです。

「父母を敬う」とは、その親の身勝手さを見ないことにして、すべてを善意に解釈するという意味では決してありません。私たちは、断固として、親に「No!」という権利が、神ご自身から保障されているのです。イエスは、弟子たちに向かって、

「そんな雀の一片でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています」(マタイ 10:29-30) という有名なことばを語られた直後に、「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っ
てはなりません…わたしは剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たのです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」(同 10:34-38) と、耳を疑うようなことを言われました。

海外で信仰に導かれた方が帰国すると、未信者の家族をみんな敵にまわしてしまうということがあるかもしれません。しかし、それは意外なことではなく、まったく想定内のことです。イエスご自身が、自分の弟子になる者に向かって、「家族の者がその人の敵となります」と、保障？してくださっているのですから。それにしても、私はこのイエスのことばに、厳しさよりも、深い愛情を感じます。これは、墓守娘や墓守息子に向かって、「親の期待や、親の価値観から、自由になって、神ご自身が、あなたひとりに期待しておられる人生を大胆に生きて良いのだよ…」という励ましのことばになります。また、親に対してアンビバレントな気持ちを抱き、真心から親を尊敬することができない人に向かって、「おまえが最初から、自分の父と母を敬うことができるぐらいなら、わたしは十字架にかかる必要はなかったのだよ…」と語っておられるように思われます。

「父と母を敬え」というのは、神の命令の核心です。ですから、父と母を敬わないことは、神の目からは、殺人や泥棒のように重い罪です。しかし、イエスはそんな親不孝者のために十字架にかかってくださったのです。それによって、あなたの親不孝の罪はすでに赦されています。もう親に負い目を感じながら生きる必要はありません。そして、あなたに、ご自身の御霊を与えてくださいました。私たちは自分の力ではなく、イエスの御霊の導きによって、また御霊が与えてくださる愛の力によって、父と母を愛することができます。残念ながら、多くの帰国者クリスチャンは、しばしば、「親にキリスト教へ

の好意を抱いてもらわなければ何も始まらないから…」という名目の元に、信仰面でのいろんな妥協をします。しかし、それは多くの場合、イエスのみこころに反します。イエスは親と子供の間で争いを引き起こすために、あなたを召したと言っておられるからです。争いが起きることにひるんではなりません。それはイエスにとって、シナリオどおりのできごとには過ぎないからです。

3. 父母との関係を一時的に切ることで、父母との関係を築いて下さる方

ただし、イエスはその前に、「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っ
てはなりません。廃棄するためにではなく、成就するためにきたのです」(マタイ 5:17)
と言われました。つまり、イエスがあなたと親との関係を引き裂くのは、あなたと親と
の関係を永遠に回復するための、一時的な外科手術なのです。「あなたのためだから…」
という親の勝手なことば聞きながら、心の奥底ではいやいや親に従うような生き方では
なく、親の人生を本当の意味で真心から重く受け止め、親を愛することができるために、
イエスはあなたと親の关系到一時的な剣をもたらして下さるのです。そして、多くの
証しを聞くと、子供の信仰に徹底的に反対していた親の方が、意外に早く、信仰に導か
れているという例を見ることができます。それは、その人がイエスを第一とした結果と
して、親が猛烈な反対をしたものの、それはまさにイエスのご計画通りのことだったので、
イエスご自身がそのプロセスを完成に導いてくださったということといえましょう。
子供の信仰を通して親が信仰に導かれると、子供は親のアンビバレントな呪縛から自由
になって、親を尊敬することができるようになります。何しろ、親自身が、その時点で、
自分の愛情には裏表があったという罪を認めて、神の前にへりくだることができている
からです。そのように謙遜になった親を、子供が真心から尊敬できるようになるのは当
然と言えましょう。ただし、だからと言って、親を教えるような傲慢な態度で接し、「ク
リスマスは、これはできない…」などと連発し、無意味に親の反感を買ってはなりま
せん。あなたのうちに住むイエスご自身が、あなたらしい親の愛し方を導いてくださ
います。イエスを心に宿しているからこそできるユニークな親の愛し方があることを、こ
とばではなく態度をもって実践することが大切なのは言うまでもありません。親にとっ
てお墓が大切だというのなら、クリスマスらしい墓守の仕方が何かを祈り求めたら良
いのです。親の期待する方法に習わずに、親の心の奥底にある願いに答える方法が必ず
与えられることでしょう。

それにしても、イエスの御霊の導きによって、父と母を敬うという生き方は、人それ
ぞれの歩みがありますから、模範的な証などは害になる場合があります。だいたい、人
の成功談を聞いて、そのとおり実行できるわけがありません。人の真似をすると、ほと
んどの場合、失敗に終わります。参考になるのは、何よりも、人の失敗例です。

私の場合は、信仰に導かれたのは 35 年前にアメリカに 10 ヶ月間交換留学をして、
その終わり間近のときでした。帰国して、自分がクリスマスになったことを言っても、
親は何の反対もしませんでした。もともと、僕が田舎を離れて農家の後継ぎにはなら
ないということが明らかになった時点で、僕の人生は親から離れた歩みになっていたから

です。違いが出たのは、たまに家に帰っても、仏壇に向かって手を合わせなくなったことぐらいです。「父と母を敬え」ということばを、どのように実践するかで悩んだこともありません。十年間の会社勤めも、その六年半はドイツでしたが、帰国して牧師への道を歩みだすときにも、反対らしい反対を受けたことはありません。

しかし、四十歳半ばを過ぎた頃から、自分は心の内面の問題に、本当に意味で向き合っては来なかったことに気づき始めました。僕は、小さいときから自分の田舎が嫌いでした。幼児期には暗い思い出ばかりがあるような気がしていました。僕には神経症的な傾向があり、心が不安定なところがあるのですが、その原因は不安定な家庭環境にあったと思っていました。クリスチャンとして歩むということは、自分の肉の父の代わりに、天の神を父と仰ぐようになることだと思っていました。イエスにあって新しい歩みをするとは、愚かにも、田舎の古い生活を捨てて、国際人としての新しい歩みをするのかのように解釈していた部分があります。しかし、あるとき、父とともに、田舎の山を登っているとき、歩き方も発想も、どうしてこうも僕と似ているのだろうと愕然としました。というより、僕が父に似ていたのですが…また、田舎をいつも飛び出たいと思っていたのは、嫁いだ家に平安を感じられなかった母の願いそのものであることが分かったのです。僕は、十代後半から、親からまったく自由に生きてきたと思っていたのに、親の徹底的な影響を受けて生きていたということが身にしみて分かりました。

牧師仲間とともにスイスで開かれた自分の人生を振り返るセミナーに家内とともに参加しました。そのとき僕は、自分が幼児期に与えられた様々な恵みの思い出を無意識のうちにも消そうとしていたことに気がつきました。自分の幼児期を暗く見すぎるとは、自分の身体や性格を嫌うことにつながります。そこからいつでもどこでも現在を喜ぶことができない、駆り立てられるような生き方が始まります。そのような中で、次のみことばが迫ってきました。

「しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。生まれる前から、私はあなたにゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です」
(詩篇 22 篇 9-10 節)

この詩篇の冒頭は、イエスの十字架のことば、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という祈りから始まります。わたしは、いつも見捨てられ不安に駆り立てられながら生きてきましたが、この祈りは、僕の心の叫びであり、イエスは僕の代わりに、このように祈ってくださったのだとわかりました。そして、イエスの復活は、この僕のいのちも神の御手の中に守られていることとしるしとなりました。そして、神をまるで産婆さんにたとえたのみことばによって、私はあの嫌っていた田舎での貧しい誕生が、神の御手の中にあったということが心の底に落ちてきました。神がああ仲の悪いふたりの親の間に、僕を生まれさせ、育ててくれたのです。親を敬わないということは、その親を与えてくれた神を敬わないことなのです。そして、親を受け入れるとは、自分を受け入れることなのです。

最近、僕は、自分らしい生き方が見えてきました。図々しく、人が何と言おうと、自分の書きたいものを書き、発表したいものを発表しようと、四冊の本を連続して書きま

した。これを何よりも喜んでくれているのが僕の母です。母が、僕に向かって、「私の友達が、お前の書く本が、本当にわかりやすいと感心しているよ…」と言ってくれます。年老いた母が、僕のことを心から喜んでくれているとわかると、不思議に、いろんな嫌なことがあっても、頑張ろうとする勇気が沸いてきます。父は、無口で自分の気持ちをあまり表現はしません。でも、父が僕のことを喜んでいるということは肌で感じられます。父母を尊敬し、父母から喜ばれる、信仰生活 35 年目の感動です。

父母を敬うとは、親を美化することではありません。そうではなくて、親の中にある矛盾した思いを、親の中にある身勝手さや不安を、やさしく見るようになることではないでしょうか。親の罪深さを認め、なおも親を愛することです。そのために、助けになるのは、親の人生の歩みを、熱心に聞くことです。親が味わってきた葛藤が理解できるなら、親の様々な問題を優しく見ることができます。そして、それはその親のもとで育ててきた自分自身を優しく見ることです。幼児期に様々な痛みがあったとしても、それとセットに、神はその痛みを乗り越える力を与えてくださいました。それはあなた固有のいのちの輝き方です。親に似ている自分を愛することができるようになるとき、あなたは自分自身の身体も性格も気質も、神によってユニークに創造された存在として受け入れることができるようになります。そのとき、あなたはあなたらしい方法で神に喜ばれる生き方ができることでしょう。あなたの創造主との交わりを喜ぶ生き方、それこそが、「しあわせになる」ということに他なりません。誰も自分の親を軽蔑して心のしあわせを味わうことはできません。

親を敬うことは、あなたの人生の土台の核心を作ることです。聖書が命じているのは、「親に伝道しなさい！」ではなく、「あなたの父と母を敬え」です。父と母を心から敬うことができるようになったら、親はあなたの信じている福音に対しても心を開くのではないのでしょうか。親の期待に沿った生き方によってではなく、イエスから示される方法で、親の心の奥底にある愛への渇きが満たされる時、親はイエスに対して心を開きます。そして、その一通過点として、親があなたの敵となるという事態も生まれます。しかし、それを恐れてはなりません。イエスを第一とするとき、イエスご自身があなたの親の面倒を見てくださるのですから。

おわりに（JCFN30 周年記念によせて）

この「別冊帰国者ワークブック」は、「帰国者ワークブック」の付録として作られました。初版は 2012 年ですからすでに 10 年が経過したことになりますが、そのほとんどの記事は、今でも変わらず帰国者たちが通らされる多くの問題である、逆カルチャーショックや、家族への証、また日本の社会で働くことや、冠婚葬祭などの日本の伝統行事にどのように対応すればよいか、そして、何よりも日本の教会をどのように理解し、どのようにキリストのからだである教会につながっていくか、というような問題を考えるヒントを与えてくれるものです。今回は、さらに日本の教会について、また日本の文化について、深く考えるために、鈴木茂師、黒田朔師、高見澤栄子師、そして大倉信師の原稿を新たに追加させていただきました。

1990 年に JCFN のミニストリーがはじまって、今年で 30 周年を迎えました。その間に多くの日本人たちが海外経験をできるようになり、いまや海外からの帰国者はめずらしいものではなくなりました。また日本も海外から多くの留学生や移民を受け入れる国へと変わりつつあり、その変化の中で、海外経験をしたクリスチャンの活躍の場は大きく開かれようとしています。

また、JCFN30 周年と時を同じくして起こったコロナ・パンデミックは社会のオンライン化を急速に進め、もはや世界のどこにいても、世界中の教会の礼拝やバイブルスタディ、セミナーや修養会等にも参加ができるようになりました。それにより、帰国者フォローアップとはなんぞや？という課題に対しての考え方や取り組み方も今後大きく変わっていくものと思われます。帰国者たちが海外にいる友人やホストファミリーたちと連絡を取りあっていくために、また遠隔地に住んでいる人たちがお互いに励ましあうために、ここまで恵まれた環境が整えられていたことは、いまだかつてないでしょう。にもかかわらず、未だに帰国者たちは孤独を感じ、家族とのギャップ、社会とのギャップに悩み、価値観の違いに苦しんでいるのです。そして、彼らの内の幾人かは完全にクリスチャンの交わりから離れ、イエス・キリストにある自分の人生の目的を見失ってしまう危機に直面しています。

この問題を解決していくためには究極的には 2 つの答えしかありません。一つは、一人一人がイエス・キリストの救いを受けた神の子、また来るべき御国の共同相続人としてのアイデンティティを本当の意味で確立していくことです。生活のすべての分野において、「神の国の価値観」を身につけ、キリストに繋がりを、私たちの内に住んでくださるキリストに、明け渡していくことです。そのようにするとき、帰国の際に直面していく、文化の違いや人間関係など、一つ一つの問題に対して、キリストの自由をもって、みことばに即して対応していくことができるようになっていくのです。

二つ目は、「いっしょに集まることをやめたりしないで」（ヘブル 10:25）励ましあい、祈りあう交わりから自分を孤立させないことです。私たちは一人で信仰生活を戦うことはできません。特に選択肢が多くなっている今だからこそ、意識して、あるいは努力して、クリスチャンの交わりに入っていく必要があります。アカウンタビリティ・グルー

プやスモールグループに連なることは、オプションではありません。私たちは、「互いに」という神様の御言葉を実践しつつ、共に歩んでいくように作られているからです。

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

主なる神様が海外ではじめられた、いえ、母の胎内にかたちづくる前から、天地創造のはじめから、選び、召し、愛してくださった一人一人の帰国後の歩みを、引き続き支え、導いてくださいますように。

私たち JCFN にお手伝いできることがありましたら、いつでもご連絡ください。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(ヨハネ 20:21)

JCFN

Appendix A 帰国者お役立ち情報

スモールグループ、地域集会に参加しませんか？

JCFN では帰国者をサポートするためのスモールグループや地域集会を全国に展開しています。お近くの集会・スモールグループにぜひ参加してみてください。自分の地域にない場合は、新しくはじめるお手伝いをさせていただきます！

スモールグループ : smallgroup@jcfn.org 梯 (カケハシ) まで

地域集会 : nihon@jcfn.org 後藤・岡田・古屋までお問い合わせください。



JCFN のメンバーになりませんか？

JCFN では折にかなって帰国者に役立つ情報や、北米・日本での修養会のご案内をさせていただいています。

ぜひ、メーリングリストにご登録ください。(無料)

<http://membership.jcfn.org/>



維持会員も募集しています。

JCFN の働きを支えるための維持会員も募集しています。[維持会員献金 : 年 30 ドル (三千元)] 3 人の帰国者に帰国者応援キットを配布するためにお志のある方は、ぜひご協力をお願いします。(登録は上記サイトより)

Appendix B 帰国者お役立ちアプリ

1. JCFN ポッドキャスト：帰国者セミナーをはじめ、信仰生活を支え、励ますためのセミナー、また過去の修養会のメッセージなどを聞くことができます！ぜひご登録ください。
iOS : <https://apple.co/2W0YYdN>
Android:<https://bit.ly/3yWRW8I>
Spotify: <https://anchor.fm/jcfm-podcast>
2. Our Daily Bread: 毎日のデボーションの配信がアプリで送られてきます！！いつでもどこでも！みことばからの励ましを受けられます。
iOS: <https://apple.co/3k7JWvh>
Android:<https://bit.ly/3st4cez>
3. 聴くドラマ聖書：新改訳 2017 の聖書をドラマ仕立てで朗読してくれるアプリ。通勤のお供に！日々のデボーションに！バイブルスタディのために！ぜひお役立てください。
iOS: <https://apple.co/3z16iET>
Android:<https://bit.ly/2VW4TRX>
PC 版 : <https://bible.prsi.org/ja/>
4. YouVersion: 新共同訳、リビングバイブル等の入った聖書アプリです。さまざまな言語とバージョンの聖書が入っているのも魅力の一つ！また、友達と一緒に進めることのできる聖書通読のためのプログラムも選べます！
iOS: <https://apple.co/3iUadxv>
Android: <https://bit.ly/3k9W2Ei>

